

第70回全国高等学校演劇大会(岐阜大会)

第48回全国高等学校総合文化祭演劇部門

生徒講評委員長

岐阜県立岐阜各務野野高等学校

上松 芹那

全体講評

上演① 鹿児島県立伊集院高等学校 「仕事のお父ちゃん」

主人公の正次が過去に罪を犯した人たちを雇い、愛と情熱を持って接するストーリーでこの劇から、「どんなところからでもやり直せる」ということが伝わり、私たちに諦めない大切さを強く感じさせてくれました。周りの人が手を差し伸べることによって人は過去にどれだけ悪いことをしても、人生をひっくり返せる、変われるという希望を感じました。

上演② 山口県立下関中等教育学校 「レベルIの勇者」

「はい」か「いいえ」の選択肢に悩む優日の姿と自分を重ねることで、人間関係の難しさを再び実感し、彼女がとった逃げるという選択の大切さを学びました。与えられた選択肢から選ぶだけで手に入る人生は、果たして本当の自分の人生だと言えるのか。自分の意思、選択がどれほどかけがえの無いものであるかが伝わりました。

上演③ 北海道帯広三条高等学校 「つぶあんチーズ」

対象的で交わることのなさそうな2人が、おやきを通じて心の距離が縮まり友情が芽生えていくところに心が温かくなりました。転校というところで、貴重な時間への後悔や離れてしまう不安や、多くの思い出を作りたいと感じた。モモカがマスクを外し、ナツミに寄り添う姿に「Let It Go」の「ありのままの姿を見せる」というフレーズが重なり、残された時間はわずかだが、離れてもこの関係が続いていくかのような結末でした。

上演④ 岐阜県立長良高等学校 「星観る者ども」

3つの世界が入り交じるなか、時空を超えて目標という1つの星に向かってひたむきに努力する姿が印象的でした。また場面転換が多い中、衣装や舞台装置によって観ている人を劇の世界に引き連れていってくれました。誰でも誰かに憧れたり、何かを目標に頑張ったりする事は、私たちにとっての星であり、その星に向かって努力し続けることが大切で、それを注意深く「観」て考えることが大切なんだと改めて気付かされました。

上演⑤ 高田高等学校 「色々々々々々々」

タイトルの通り、登場人物7人それぞれの「色々」が沢山出てきた。7人の複雑な背景を「色々」という言葉で表すことでさらに主人公が苦しめられているのではないか、などの話題が出た。今世間で飛び交っている「多様性」という言葉の難しさ、多様性とは何かを改めて考えさせられた。

上演⑥ 宮崎県立宮崎南高等学校 「学校の片隅で、数式を叫ぶ」

劇を通して、とてもコミカルな会話や宮崎弁が面白いなかでも、先生や生徒の影の努力が互いに影響を与え、共に成長していく姿に感動し、先生と生徒が対等であるところから、人との関わりが強く表現され心温まる作品でした。普通、先生と生徒は教える側と教えてもらう側で対等ではないけれど、この劇では一緒に発声練習をしたりダンスをしたり授業の練習をしたりすることで生徒が先生を助けていて、変わって行く先生の姿に彼女たちも影響を受けて頑張ろうと思ったのではないかと思います。

上演⑦ 千葉県立松戸高等学校 「私達の、小さな物語。」

特に教師になりたいわけでもないが教育実習を受けていたが、最後には各々の道を切り開いたところから、様々な経験によって未来が広がると感じたし、なりたいものに諦めずに突き進む姿勢に感動した。また、いじめや戦争は終わらないという事実に残酷さを覚え、私たち若者がどうすれば未来をより良くできるか考えさせられた。

上演⑧ 青森県立青森中央高等学校 「駈込み訴え」

モモカがコスズを裏切ろうにも、恨みや憎しみの中にも愛が入り交じってしまうことから、2人の不安定な依存関係が感じられました。苦しみや辛さが伝わって来るのにも関わらず、2人に雪が降り積もる場面には妖しい美しさがありました。「ユダは誰の心にもいる。」という台詞が心に突き刺さり、人の心にも同じような明暗があり、苦しく、恐ろしくなる作品でした。

上演⑨ 兵庫県立東播工業高等学校 「廻る」

梶谷と宮川を中心とした登場人物たちが観覧車という特別な場所で関係性を変化させていくところから、友達と一緒にいることのありがたさを感じた。また離れても話の中に出てくることから、人と人が繋がっていて観覧車のように回っていると感じました。人と人はいろいろなところでつながっていて、世界は広いようで狭いのだなと改めて感じた。劇中で観覧車は解体されるが、きっとフィリピンでも人と人を繋いでいるのではないかと思います。いつかどこかで二人が出会ってほしいと思います。

上演⑩ 目黒日本大学中学校高等学校 「ごめんね、ごめんて!」

萩本先生の生徒を思う心は変わることなく、彼らを思い奮闘する姿から、逃げずに向き合うことの大切さを考えさせられた。また問題に立ち向かうことで、ピンチをチャンスに変え成長できるということを教えられました。最後まで萩本先生の愛を感じられ、自分に向き合ってくれる人や、夢を追いかけて続けることの重要性を再確認させてくれる作品でした。

上演⑪ 徳島県立城東高等学校 「その50分」

戦争や内戦とリンクさせながら、文化祭や体育祭の準備を通して争っていくクラスの様子が描かれていた。小さな争いが大きな争いにつながり、冷静に話し合おうとしても聞いて貰えないという様子から、戦争や内戦の実態や危うさが伝わってきました。私たちが知ろうとしなければいけない、発信して行かなければいけないという強いメッセージを感じました。

上演⑫ 東京都立千早高等学校 「ちんぷんかんぷんぷん」

人数分の学校椅子だけを使って舞台を廻していくのが新鮮でした。作品では現代の高校生、特に女子の日常が描かれていて共感する場面が多くありました。最後の椅子を中央に集めて手を繋いでマイムマイムを踊るシーンはキャンプファイヤーが想像され、いつか火が消えてしまうように高校生活も終わってしまうけど充実した楽しい時間をすごしていることが表現されていたと感じた。何気ない会話に耳を塞ぎたくなるような出来事もあって、会場が思わず笑いに包まれたけど、これは笑ってはいけないと気付かされる演出には一種の不気味さがありました。